

こころをひらき 未来をひらく

＜家庭、地域、学校が一体となって、
子どもたちの未来を育もう＞

未来を切り開ける子どもに・・・大人ができること

いよいよ、年度末が近づいてきました。学校には、「式」と名のついた行事がいくつかあります。その中でも「卒業式」をもっとも大事な行事として取り組みます。この行事を通じて育むことのできるものがたくさんあるからでしょう。当日の1時間余りの式に向けて、何度も何度も練習を重ねるのです。※今年はこれができませんでした。

式終了後、いっぱいいっぱい誉めてあげる対象は「在校生」です。「6年生（卒業生）をお祝いする心が持てたね。」「お祝いする心が伝わってきたよ。」って。

誉めるからには、それなりの責任やノルマを課すことになります。練習を続ける中で、少しずつ少しずつ、プレッシャーを与えていきます。本番では、そのプレッシャーは最高潮に達します。式が終わり、来賓の皆様がご退場されるまでそのプレッシャーは続きますが、その後の達成感も万感です。



夢に向かうとき、誰しもがプレッシャーを感じます。大きなプレッシャーに押しつぶされそうになることも一度や二度ではないでしょう。また、自分に対してわざとプレッシャーをかける場合もあります。自身に課題を与え、それを乗り越えたとまた次の課題を、といったように。プレッシャーが、やりがいや生きがいにつながることは多いものです。

少し難しい話になりますが、「発達の最近接領域」という言葉があります。これは子どもの発達や教育において、非常に重要な概念とされています。＜ロシア ヴィゴツキー (Vygotsky, L. S.) >

それでは、ヴィゴツキーの提唱した「発達の最近接領域」とは何でしょうか。最近接領域とは、何か2つのものの中にある「へだたり」とあると考えられています。では、その2つのものとは何でしょうか。

1つは、「子どもがある課題を1人でとける発達の水準」です。

もう1つは、「子どもがある課題を、自分より能力の高いもの（親とか教師とか）と共同することによってとける発達の水準」です。これをわかりやすく、算数を例にとって説明してみましよう。

子どもが算数の問題を解いているときに、1人ですらすらと解けるとしましょう。この時には、1つ目の水準にあると考えられます。では、1人ではできない問題に直面したときに、大人や自分より能力の高い人、あるいは参考書などからのヒントがあって、やっと解くことができたとしましょう。このときには、2つ目の水準にあると考えられます。そして、この2つの水準の「へだたり」が、子どもの発達の潜在領域を意味しています。つまり、子どもを成長させるためにはこの水準のへだたりの部分、すなわち「最近接領域」にアプローチすることが重要であると考えられているのです。このように考えると、子どもが「できるかできないか」くらいのレベルの課題を与えることが、発達にとって重要であると一般化されて考えられるようになります。【PsychJapan】HPより

子どもの成長の過程で、私たち大人ができることは何でしょうか。未来をひらいていける子どもを育むためにできることは何でしょうか。答えは無数にあるような、ないような。少なくともその一つが、愛情であることは確かです。 文責 校長：菅原